◆静岡市立登呂博物館

「昭和 100 年」関連施策実地レポート

このコーナーでは、内閣官房「昭和 100 年」関連施策推進室の室員が、各地で開催されている関連施策を訪問し、感想を含め皆様へご紹介します。

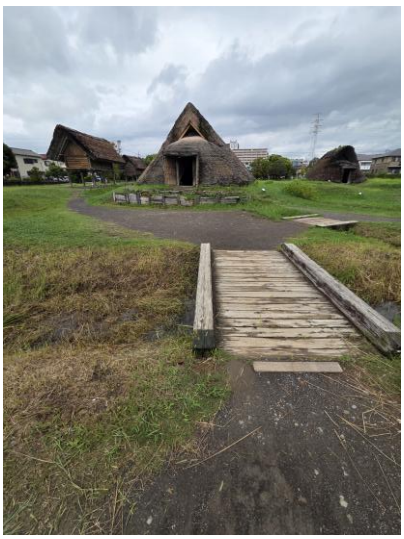
今回の訪問先は、静岡市立登呂博物館です。

夏季企画展　「昭和 100 年記念　登呂遺跡から見た日本のあけぼの」

URL：夏季企画展「登呂遺跡から見た日本のあけぼの」 ｜ 静岡市立登呂博物館

静岡市立登呂博物館（静岡県静岡市駿河区登呂五丁目 10 番 5 号）では、昭和 18(1943)年および昭和 22～25(1947～1950)年に実施された登呂遺跡第 1 ～ 5 次調査の発掘記録と出土品を通して、戦前から戦後にかけての日本社会の「あけぼの」を振り返る企画展を開催しています。

○屋外施設





登呂博物館の敷地内には、弥生時代の建物が復元されており、住居（平地式住居）や高床倉庫、祭殿が立ち並んでいます。また、弥生時代の農業体験を行うための稲が育てられており、一面に田園風景が広がっています。私が到着したときは白鷺が飛来して出迎えてくれました。

◆静岡市立登呂博物館

○　情報・映像コーナー、常設展





登呂遺跡は誰しもが知る有名な遺跡であり私も学校で習いましたが、詳細は覚えていませんでしたので、まずは常設展示と情報コーナーを観覧して学び直しから始めました。年表を見たところ、稲作の伝来は縄文末期、静岡地域で米づくりが始まったのは紀元前 200 年頃の弥生時代とのこと。少し驚きです。私が学校で習った古代史は、“縄文時代＝狩猟・採集、弥生時代＝稲作”でしたが、考古学研究の進捗により歴史はどんどん変わってきているようです。登呂遺跡は昭和 18（1943）年に発見、戦後の昭和 22（1947）年から昭和 25（1950）年の 4 年間にわたって本格的な発掘調査が行われた結果、日本で初めて水田跡が見つかったとのことです。再発掘調査が平成 11（1999）年から 5 年間にわたり行われ、登呂遺跡の集落は洪水によって全体が土砂で埋まった後、復興していったことが分かったそうです。登呂遺跡は国の特別史跡に指定されており、出土した土器等のうち 775 点は国の重要文化財に指定されています。

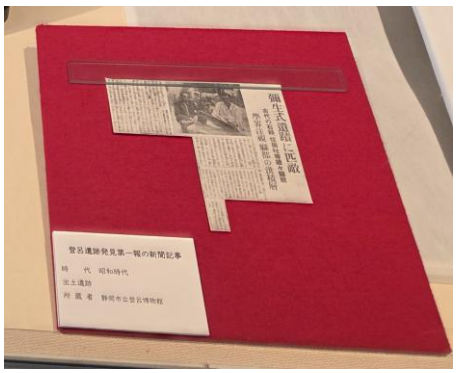
出土した木製の農機具が数多く展示されていました。解説によると、木は湿度の高い土の中では腐らずに残るとのことで、この地域はすぐ下に地下水が湧いており、また、川の流れによって運ばれた土が重畳的に堆積して遺構に蓋をして乾燥を防いだことにより多くの木製遺物が残る環境が形成されていたとのことです。なお、大量に出土した木製の道具類には、鉄の刃物による加工が見られるそうで、この地域の土壌の性質からか、鉄の道具類は腐食してほとんど出土されていませんが、鉄製器具も存在していたことがわかっているそうです。鉄製が残らず木製が残るのは大変驚きです。また、木材はリサイクルされていたようで、使えなくなった大きな木製の道具は、小さな道具に再利用されたということもわかっているそうです。

当地で実施された保存・展示の方策、例えば、水田跡などの実物の遺構は土の中に残し別の場所に建物を復元したことや、出土遺物を展示する施設を整備し展示したことなどは、その後の各地での史跡整備の手本にされたことなども紹介されています。

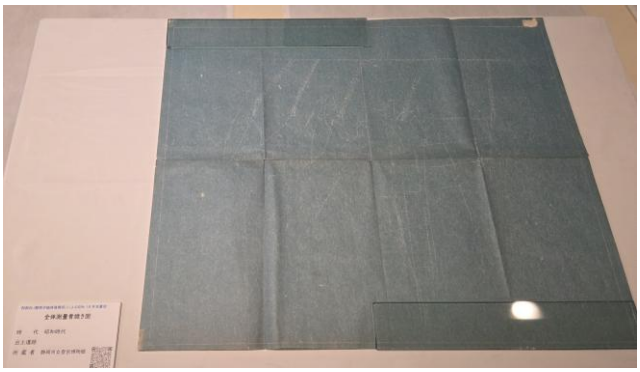
◆静岡市立登呂博物館

○夏季企画展

第 1 章では、発見経緯と第 1 次調査について紹介されています。昭和 18（1943）年に住友金属の軍需工場建設にあたって採土した際に、数多くの土器片や木製品が出土し、これらが学校の勉強に役立つのではないかと考えた工事関係者が学校に出土品を集め、学校長が専門知識を有する地元の教諭へ調査を依頼したとのこと。調査の結果、その教諭は重要な発見であると判断し新聞記者へ連絡、全国紙で報じられると、全国から多くの専門家が集まり、第 1 次調査実施に至ったという経緯が紹介されています。地元の静岡市復興局が第 1 次調査よりも先に測量と遺物収集を行っていたことや、昭和 20 年の空襲の際にわが身を顧みず懸命に消火活動を行い、出土品を避難させた方がいたことにより貴重な資料が焼失を免れ、現在に伝えられていることなども紹介されています。戦時中の混乱期に、人々の叡智と熱意と行動が、貴重な遺跡の発見や保全に繋がっていったことがよく伝わってきます。



発見を報じる新聞記事（昭和 18 年）



静岡市復興局が実施した測量図（昭和 18 年）

第 2 章では、戦後の発掘調査について紹介されています。戦後に研究会や調査会が組織され、昭和 22 年に第 2 次発掘調査が開始されたことや、全国的な考古学組織である「日本考古学協会」が組織されるに至ったこと、発掘調査には考古学者だけでなく地理学、動植物学、建築学など様々な分野の専門家が参加し、全国に先駆けた学際的な調査となったことなどが紹介されています。当時はまだ戦後間もない時期で、食料や物資も事欠く社会状況でありながら、日本人のアイデンティティを取り戻す契機として注目され、国庫補助（昭和 23 年度文部省人文科学研究費交付金　等）が充てられるに至ったそうです。当時の稟議書など関係資料が数多く残されています。戦後の混乱期に、学術的な価値に尽力された方々の熱意がここでも伝わってきます。



当時の稟議書など

◆静岡市立登呂博物館

第 3 章では、登呂博物館の収蔵資料について紹介されています。登呂博物館では 3 万点以上の出土品や関係資料が収蔵されており、そのうち約 400 点がデジタルデータ化され公開されているとのことです。出土品の劣化を防止するため平成 30 年から保存処理事業を進めていることや、企業の協力により出土品等の 3 次元データ化が進められ活用について検討を行っていることなども紹介されていました。現地では QR コードから手持ちのスマートフォンで 3 次元画像を閲覧することができ、ひっくり返したり様々な角度から立体的にみることができ、展示物と見比べて詳しく楽しく鑑賞することができました。



展示の最後のパネルには、「登呂遺跡が日本の弥生時代を象徴する遺跡として紹介されることが少なくなりました」と記載されていました。お話をお伺いしたところ、各地で遺跡が発見され研究が進み、最近では時代の転換期を表す他の遺跡が教科書で取り扱われる傾向があるため、登呂遺跡についての記述が減っているとのことでした。仕方のないことのようですが、率直に、この有名な遺跡を学校で習わない子供たちが増えていくのはとても残念に思います。昭和 100 年を機に開催されたこの企画展を通して、戦中戦後の大変な混乱期に学術的価値に気づき、それを守り、伝え、日本の考古学の礎を築いた昭和期の偉大な先人の叡智と情熱を顧みることができました。このような登呂遺跡の「あけぼの」としての社会的価値が、様々な機会を捉えて未来に生きる多くの子供たちに繋がり続けてほしいと思います。

同館では、米作りや収穫体験、石器作り体験、火起こし体験など各種のイベントが随時開催されています（イベント ｜ 静岡市立登呂博物館）。

会期：令和 8 年 7 月 18 日（土）～9 月 13 日（日）
主催：静岡市立登呂博物館
住所：静岡県静岡市駿河区登呂五丁目 10 番 5 号